

# 9 課

8月27日

## 賛美の人生



安息日午後 8月20日

### 暗唱聖句

あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。(ピリピ4:4、口語訳)

主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。(フィリピ4:4、新共同訳)

### 今週の聖句

フィリピ4:4~7、ヨシュア記5:13~6:20、詩編145編、使徒言行録16:16~34、歴代誌下20:1~30

### 今週のテーマ

いつでもうれしいときに大きな声で主を賛美するのは簡単です。しかしながら、物事がうまくいかないとき、想定される最悪の状況にあるとき、試練のつぼみが熱く熱せられているときに賛美することは簡単ではありません。しかし、そのようなときにこそ、おそらく他のどのようときにも増して、私たちは主を賛美する必要があるのです。なぜなら、賛美は私たちの信仰を保つために助けとなる一つの手段であるからです。

実際に、賛美は最悪の状況さえ変えることができます。それはおそらく、私たちの周囲の状況を変えるということではなく、私たちを変えることであり、さらに、私たちを変えたのと同じように私たちの周りにいる人たちをも変えることができるということを意味します。

賛美は行動に現された信仰です。それは私たちにとって必ずしも自然なことではありません。しかし、人生の一部になるまでに賛美を実践するとき、それは回心と勝利する力があるのです。

### 今週のポイント

賛美とは何でしょうか。困難な状況にあって、賛美はどのようにこのように強力な霊的武器となることができるのでしょうか。賛美はどのように私たちを変え、周囲の状況を変えることができるのでしょうか。

フョードル・ドストエフスキーは、死刑を宣告されましたが、その宣告は執行寸前に特赦により減刑され、彼は獄中で数年を過ごしました。その獄中体験から彼は次のように述べています。「最後まで信ぜよ。たとえ万人が道に迷い、信じる者があなた1人になろうとも。そのような時にも献げ物をささげ、孤独の中で神を賛美せよ」

私たちは数課にわたってパウロが信じがたいほどの反対と迫害に耐えたことを学んできました。しかし今、彼はローマの監獄にいます。そしてなおも落胆することなく、フィリピの信者たちを熱く勇気づけるために手紙を書いています。

**問1** フィリピ4:4~7を読んでください。パウロは自らが獄中にありながらなぜこのような手紙が書けたのでしょうか。ここにどのような「神の平安」を得る秘訣が示されていますか。

すべてが順調なときに喜ぶことは普通です。しかしパウロは、いつでも喜ばなさいと訴えます。これは不思議なことのように思えます。しかし文字通りに受け取るなら、パウロの手紙には二つの重要な意味が含まれています。

第一に、常に喜ぶとは、私たちの周囲の状況が何ら喜ぶ状況にないときでさえ喜ぶことを意味します。第二に、常に喜ぶとは、そのような気分になれないときにも喜ぶことを意味します。

パウロは、まったく喜ぶにはそぐわないと思えるときにも、神を賛美するように勧めています。それは理屈に合わないことに思えます。しかし私たちは、まさに理屈に合わないと思えるときにこそ、喜ぶように招かれているのです。言い換えれば、賛美は信仰の行為です。ちょうど信仰が周囲の状況でなく、神についての真実に基づくのと同様に、賛美は気分がいいからではなく、神はどのような方であり、私たちに何を約束してくださったかについての真実に基づく行為なのです。さらに驚くべきことに、そのような信仰こそが、私たちの思想と感情、そして状況をも形づくります。

パウロが言うところの、獄中でも喜ぶことのできる真理とは何でしょうか。あなたの知る神の真実をリストアップしてください。その一つひとつについて賛美するとき、あなたの感情と状況がどのように変わるでしょうか。

英語に「隅に取り残される」という表現があります。部屋の床のペンキを塗っているうちに、いつの間にか部屋の一角に自分で自分を追い詰めてしまって、ペンキが乾くまではそこから出るに出不来という状況になることを言います。

時に信仰が私たちが部屋の隅に追い詰めるように思えることがあります。ある状況では塗りたての床のように、信仰が私たちを「閉じ込め」ます。私たちはその状況を見て、神、信仰、そして私たちが信じることをすべてを拒絶するか、さもなければ、信仰が不可能に見えることを信じるように強いるのです。

神はイスラエルを「隅」に追いやりました。荒れ野での40年の放浪後、神は民を平和な牧草地には導かれませんでした。神は彼らをその地域で最も堅固に要塞化された町へと導かれました。彼らはエリコの周囲を黙って6日間歩かねばなりません。神は民に7日目に関の声を上げるようにお命じになります。そしてその関の声と、鳴り響く角笛の音がイスラエルに勝利をもたらすのでした。

**問2 ヨシュア記5：13～6：20を読んでください。神はイスラエルに何を教えようとされたのでしょうか。**

関の声の振動が城壁を崩す引き金になったわけではありません。神のイスラエルに対する「関の声をあげなさい」との招きは、ダビデが詩編66編で、「全地よ、神に向かって喜びの声をあげよ。御名の栄光をほめ歌え。栄光に賛美を添えよ」(1, 2節)と書いているのと同じ関の声です。この関の声は賛美だったのです。巨大な城壁を6日間見回った後、彼らは自分たちの力でそれを崩すことは不可能だと結論に達したに違いありません。

**問3 この考えはヘブライ11：30を理解する上でどのように助けとなりますか。**

神が私たちの人生に何か新しいことをなさる際、勝利する力が私たちの力や計画の中にはないことを教えるために、私たちに「エリコ」をお与えになります。必要なものはすべて私たちの外から来ます。ですから、私たちの前にあるものは何でも、それがどのように打ち勝ちがたく見えても、私たちのなすべきことは、必要なものすべての源である神を賛美することなのです。これこそが、行いに現された信仰です。

主を賛美することは、良い状況にあっても私たちにとって自然なことではないかもしれませんが。だとすれば悪い状況ではなおさらです。しかしだからこそ、私たちは賛美するように招かれているのです。私たちは、賛美が特別な行為から、私たちを取り巻く空気のようなものに変わるまでは練習する必要があります。賛美はある特別な行為ではなく、生き方そのものにならなければなりません。

**問4** 詩編 145 編を読んでください。ダビデは神に賛美を献げる理由は何だとしていますか。この詩編はどのようにしてあなた自身のものとすることができるでしょうか。

偉大なイギリスの説教家チャールズ・スポルジョンは、『賛美の実践』と呼ばれる本を書きました。この本は詩編145：7に基づいています。この短い節からスポルジョンは、賛美の人生にするために必要な三つの注目すべきことを挙げています。

**1. 周囲に目を向けること** 私たちの周りにある神の偉大さに気づかなければ、賛美する理由を見つけることができません。あなたは神が創造された世界に、創造の美しさといった賛美に値するものを見ることができますか。また霊的な世界に、若いクリスチャンの信仰の成長のように、賛美に値するものを見ることが出来ますか。

**2. 見たものを忘れないこと** 賛美の雰囲気の中に生きたいと望むなら、その理由を覚えていなければなりません。どうすれば私たちは神の偉大さを覚えていられるでしょうか。神の善意を思い出させる儀式やシンボルを新たに作るなどによって神の善意と真実を忘れないでいられるでしょうか。

**3. 見たものについて語ること** 賛美することは頭の中だけで完結しません。それは言葉となって口から出、聞く人の耳に入ることを意味します。あなたには言葉をもって神を賛美するどのような理由がありますか。そのような聞こえる形での賛美は、どのような人たちの上に、どのような効果をもたらすでしょうか。

上記の三つの項目について、それぞれ答えを書き出してみましょう。あなたは人生に賛美の習慣をどのように育むことができるでしょうか。

使徒言行録では、賛美はそれを聞いた者たちに驚くべき影響を及ぼしました。使徒言行録16：16～34を読んでください。衣服をはぎ取られ、鞭で打たれ、パウロとシラスは牢に投げ込まれました。背中へのひどい打ち傷に塗る軟膏を塗ってくれる者などだれもいません。大きな肉体的苦痛の中で、足枷あしかせをはめられ、彼らは一番奥の牢の暗闇の中にいました。しかし、パウロとシラスが賛美の歌を歌い、祈り始めると、囚人たちは座ってこれに聞き入っていました。

大地震の後、パウロとシラスも、他の囚人たちも逃げていないのを見た看守は、「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか」（使徒16：30）と言います。

**問5** この出来事が看守の目を自分の救いの必要に向けさせたのはなぜでしょうか。パウロとシラスの獄中での祈りと賛美、そして囚人たちが逃げなかったことは、看守とその家族の回心にどのような役割を果たしたのでしょうか。

私たちの賛美が、周囲の人々の永遠の運命を変えることができると考えるのはすばらしいことです。もしパウロとシラスが、囚人たちが通常するように、ぶつぶつ不平を訴えていたなら、この夜、だれが救われたでしょうか。

その後、看守とその家族に何が起こったかはわかりません。しかし、後にパウロがローマの牢獄で書いた手紙を読んでいたかもしれません。「つまり、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。あなたがたは、わたしの戦いをかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです」（フィリ1：29、30）。彼らはこれを読み、パウロの苦しみがどのように彼らに喜びをもたらしたかを思い起こし、彼らの心に賛美をもたらし、どのような犠牲を払ってでも忠実であり続けるための新たな挑戦へと彼らを導いたことでしょう。

あなたには、あなたの心からの賛美の歌によって神のために感化を与えた人がいますか。あなたの神への賛美が周囲の人々にもっと開かれ、あふれるようにしましょう。そのような賛美にどのような明確な力があるか知ることができましょう。

歴代誌下20:1~30を読んでください。ヨシャファトがこの経験を通して悟ったように、賛美は強力な武器です。敵の「大軍」が迫っているとの報告を受けたヨシャファトは、すぐに軍事行動に飛びつくようなことはしませんでした。彼は「主を求めることを決意し」（代下20:3）ます。ユダの人々が断食のためにエルサレムに集まると、ヨシャファトは現実の状況を認めて言います。「わたしたちには、攻めて来るこの大軍を迎え撃つ力はなく、何をなすべきか分からず、ただあなたを仰ぐことしかできません」（同20:12）。

**問6 「大軍」が攻めてくるのを見たとき、あなたは本能的にどのような反応をするでしょうか。歴代誌下20:3~12のヨシャファトの対応から、あなたを圧倒する敵の勢力への対応についてどのようなことを学ぶことができますか。**

主の霊がヤハジエルに臨んで、次のように大胆に宣言します。「そのときあなたたちが戦う必要はない。堅く立って、主があなたたちを救うのを見よ。ユダとエルサレムの人々よ、恐れるな。おじけるな。明日敵に向かって出て行け。主が共にいる」（代下20:17）。その後、彼らは「大声を張り上げて」（同20:19）神を礼拝し、主を賛美しました。神が彼らのために戦われるのですが、彼らはそれでも、敵に向かって出て行かねばならぬのでした。

しかし、それは通常の進軍ではありませんでした。ヨシャファトは主を賛美するために聖歌隊を組織し、軍隊の先頭を進ませました。「彼らが喜びと賛美の歌をうたい始めると、主はユダに攻め込んできたアンモン人、モアブ人、セイルの山の人々に伏兵を向けられたので、彼らは敗れた」（代下20:22）。聖書記者によれば、神は、彼らが主の約束を信じて行動を起こしたまさにその時に介入されたのです。それは彼らが「主の聖なる輝きをたたえ」（同20:21）始めた時でした。

歴代誌下20:1~30をもう一度読んでください。あなたはそこに、あなたが神と共に歩むとき、特に試練の時やストレスを感じるときに助けとなるどのような霊的原則を見いだしますか。

参考資料として、『国と指導者』第15章「妥協するヨシャパテ王」、『人類のあけぼの』第45章「エリコの陥落」を読んでください。

「だからこの比類のない神の愛のゆえに、彼をほめたたえるように自分の心とくちびるを教育し、魂が希望にあふれ、カルバリーの十字架から輝く光の中にいることができるように教育しよう。わたしたちは天の王の子であり、万軍の主の息子、娘であることを忘れてはならない。神によって静かな平和を保つことは、わたしたちの特権である」(『ミニストリー・オブ・ヒーリング』新装版167ページ)。

「わたしが主をあがめ、賛美している間、あなたがたもわたしと共に主を賛美していただきたいのです。あなたが暗闇に落ち込むときにも主を賛美しなさい。誘惑のときにも主を賛美しなさい。『主において常に喜びなさい』と使徒は言います。『重ねて言います。喜びなさい』(フィリ4:4)。賛美はあなたの家族に陰と暗闇をもたらすでしょうか。そんなことはありません。賛美は日の光をもたらすでしょう。そうしてあなたは栄光の御座から注ぐ永遠の光の光線を集めて、あなたの周りに輝かせるのです。わたしはあなたがこの働きに献身するよう強く勧めます。あなたの周囲にこの光と命を輝かせなさい。自分の歩く道だけでなく、あなたに連なる人々の道にも輝かせなさい。あなたの周りにいる人々をより幸福にし、彼らを引き上げ、彼らに天と栄光を指し示し、そして彼らが地上の何ものにも増して、永遠のもの、不朽の遺産、不滅の豊かさを求めるように導きなさい」(『教会への証』第2巻593、594ページ、英文)。

### 話し合いのための質問

- ① クリスマン人生において教会共同体としての賛美はどのような役割を果たしているでしょうか。安息日礼拝の賛美についてはどうですか。あなたの霊性を高めていますか。試練やトラウマの中にいる信徒が信仰の励ましになっているでしょうか。そうでなければ、何ができるでしょうか。
- ② 「あなたが暗闇に落ち込むときにも主を賛美しなさい。誘惑のときにも主を賛美しなさい」とはどういう意味でしょうか。賛美はこのような状況でどのような助けとなるでしょうか。
- ③ 生活に影響を与えた賛美の経験があれば分かち合いましょう。お互いの経験からどのようなことを学ぶことができるでしょうか。
- ④ 賛美の詩編を選んでクラスで読んでみましょう。それらは賛美について何を教え、あなたの信仰にどのようなインパクトを与えるでしょうか。

## 結婚からキリストへ

オリベイラは、ジュニオールがバプテスマを受けるとき、自分も一緒に受けたいという願いを持っていました。その思いをリカルド牧師に伝えると、彼は真剣なまなざしで彼女を見つめ、「法的に結婚していない以上、バプテスマを受けることはできません」と告げました。思ってもいなかった返事に、オリベイラは驚きました。夫と内縁関係である以上、息子と同じ日に一緒にバプテスマを受けることは不可能だったのです。リカルド牧師は、「心配しなくても大丈夫ですよ。エドゥアルドに結婚を申し込めばいいんですから」と落胆した彼女を励ました。

オリベイラは、涙を流しながら教会をあとにしました。エドゥアルドが承諾してくれるとは思えませんでした。その日のうちに、「聞きたいことがあるの。あなたの答えがどんなものであっても、私たちの関係そのものは変わらないんだけど……、私たち籍を入れない？」と尋ねました。やはり、エドゥアルドの返事は明確でした。「いやだ。君と正式に結婚するつもりはない」

しかし、ジュニオールがバプテスマを受けたあとにイエスを受け入れる決心をしたエドゥアルドは、オリベイラにプロポーズし、2人は正式に結婚することになりました。バプテスマを受けられるようになった彼女は喜びました。

オリベイラのバプテスマ式の前日、エドゥアルドとジュニオールは教会に行き、オリベイラが聖歌隊の練習をしているのを聞いていました。その時、教会の装飾に使われていたはしが突然倒れ、その上に立っていた男性がエドゥアルドに激突し、彼は床に叩きつけられてしまいました。エドゥアルドは大丈夫だと言いましたが、しばらくして悲鳴をあげ始めました。2つの悪霊がエドゥアルドに取りついたので。ジュニオールは父のもとに駆け寄りました。ジュニオールは、キリストとサタンの大争闘について聞いたことはありましたが、直に目撃したことはありませんでした。彼は祈りました。聖歌隊は自然に歌い始めました。「イエス・キリスト、あなたは花婿、農夫、私の父、私の羊飼い、高価な真珠です。キリストよ、あなたはすべてです」

1時間ほど祈り、歌ったあと、エドゥアルドは元に戻りました。安息日の朝、まだ痛みはありましたが、彼はジュニオールと一緒に教会でオリベイラのバプテスマ式に参加し、オリベイラは喜びのうちに水に沈みました。

(アンドリュー・マクチェスニー)